平成２１年度　特別研修　研究報告書

不登校を予防するための援助
～好ましい人間関係の育成をめざして～

生徒指導相談係
阿部　光一（中学校教諭）
和田　佳子（高等学校養護教諭）
根岸　香織（高等学校教諭）

Ⅰ　主題設定の理由

生徒の実態として、「自己肯定感が低く、自分に自信が持てない」「学校生活の様々な場面において人間関係が希薄である」「新たな人間関係を築けず表面だけの付き合いになっている」等の生徒は、「人間関係の不満を直接やりとりできない」「コミュニケーション不足により、好ましい人間関係が育めない」「学級内での孤立感から逃避してしまう」傾向がある。このような生徒は、学級や学校への集団不適応をおこし、不登校に陥ってしまうおそれがある。これらを改善するためには、自己肯定感を高めさせることや生徒一人一人が自分の良さに気づくこと、互いに認め合える人間関係づくりが必要である。そこで、互いに認め合える好ましい人間関係の育成を図ることは不登校の予防につながると考え、本主題を設定した。

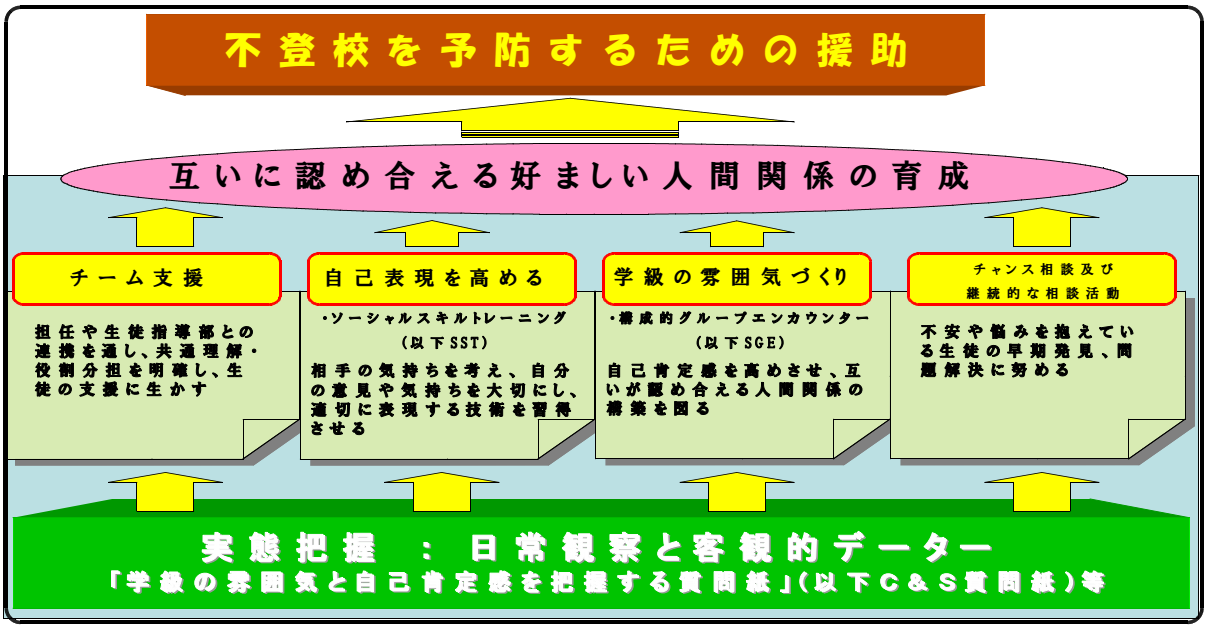
Ⅱ　研究のねらいと課題解決策

１　ねらい

『生徒と生徒、教師と生徒』が互いに認め合える好ましい人間関係の育成を図ることは、不登校の予防に有効であることを実践を通して明らかにする。

２　対象生徒　　中学生・高校生・単位制高校通信課程生徒

３　手だて



４　検証方法

・日常観察・「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙」（以下Ｃ＆Ｓ質問紙）の分析（学級の雰囲気及び自己肯定感が下位群の変容）

・事後アンケートによる考察

Ⅲ－1実践

特別研修員　　阿部　光一

1　実態

本学級の生徒は、とても素直な生徒が多く、男女仲がよく、係活動など男女が協力し合って取り組める。全体的には落ち着いた生活を送ることができている。しかし、様々な活動に取り組むまでに時間がかかりすぎてしまう点や他人の弱い面や失敗を指摘して安心感を得ている生徒が見られる。また、男女の学力差も大きく、女子の学力は非常に高い（定期テストの男女別平均点の差は約 10 点）。小学校との引き継ぎの際、不登校傾向であるとの申し送りを受けている生徒が在籍している。何事にも主体的に取り組める生徒とそうでない生徒の差も大きい。特に主体的に取り組めない生徒達は、指示を受けても直ぐに行動に移すことができず、不安そうな表情を浮かべ、誰かに頼る傾向にあり、仲間の様子を見てから行動に移すことが多い。このような生徒の大半は、日常観察の様子や「Ｃ＆Ｓ質問紙」などからみても、自己肯定感が低いことが分かる。さらに、このような生徒の中には、不登校傾向が見られる者もいる。

2　実践研究の考え方

(1)　研究のねらい

自分の存在が認められ､教師と生徒や仲間同士の互いが認め合える好ましい人間関係を深め、自分に自信を持って活動できる生徒を育成し、温もりのある学級づくりが不登校の防止につながると考える。

(2)　指導方針

①　実態把握及び検証について

・日常観察を大切にし、Ｃ＆Ｓ質問紙を活用し、生徒の実態把握に努め、生徒の変容及び検証の手立てとする。
・定期的な学級代表との話し合いをもち､『生徒の目から見た学級のようす』から不安を抱えている生徒等の把握に努める。

②　互いに認め合える好ましい人間関係を深める活動〔集団への支援･個への支援〕について

ア　集団への支援

・互いを認め合えることをねらいとする構成的グループ・エンカウンター（以下ＳＧＥ）を取り入れ、自己肯定感を高め、信頼関係を深めさせる。
・班活動及び全体での話し合い活動を通して、自分の意見と他の意見の交流させ、自分の良さや相手の良さを認め合い、相互理解を図り、仲間との信頼関係を深めさせたい。

イ　個への支援

・日常の観察から不安そうな生徒には、声かけを行い、不安や悩みの有無を確認し、チャンス相談を通して問題解決に努める。
・定期的に学級代表との話合いをもち､『生徒の目から見た学級のようす』から、不安を抱えている生徒等の把握に努め、チャンス相談に活かす。また、班活動での役割分担を明確にし、責任をもってやり遂げる場面を設定し、達成感を味あわせる。
・月ごとにクラス集合写真や共通実践を目指すクラスのルールの掲示に心がけ、達成感・成就感・一体感等を振り返らせる。

3　研究計画及び検証計画

(1)　研究計画

取　組	ね　ら　い
○実態把握及び検証について	
・Ｃ＆Ｓ質問紙、日常観察及び学級代表との定期的な話合い。	・「Ｃ＆Ｓ質問紙」や担任による日常観察などにより、個や集団の学級の雰囲気を把握し、指

	導や検証の手立てにする。
○互いに認め合える好ましい人間関係を深める活動＜集団への支援＞について	
＜ＳＧＥ＞	・肯定的な言葉の交流を通して、好ましい人間関係の育成を目指し、自己肯定感を高めさせ、好ましい人間関係の育成を目指す。
7月 ・学期を終えるにあたり、「クラスの仲間から感謝の言葉をもらいましょう」	
10月 ・合唱コンクールに向けて、「クラスの仲間からアドバイスをもらいましょう」	
＜班活動及び全体での話し合い＞	・好ましい人間関係を深めるクラスのルールづくりの活動とルールの共通理解・実践を通して、好ましい人間関係の育成に役立てる。 ・自分の意見と他の意見の交流を通し、自分の良さや相手の良さを認め合い､相互理解を図り、仲間との信頼関係を深めさせる。
5月 ・好ましい人間関係を深めるクラスのルールづくり（人に迷惑をかける行動とは？）。	
9月 ・体育祭に向け、「黄色団優勝に向けて、何が必要だろうか？」	
10月 ・「合唱コンクールで最優秀賞をゲットするために必要なことは何だろうか?」	
○互いに認め合える好ましい人間関係を深める活動＜個への支援＞について	
＜チャンス相談・学級代表との定期的な話し合い＞ ＜学級掲示の環境を整える＞ ・クラスのルールや毎月のクラスの集合写真を掲示。	・チャンス相談や生徒への声かけを意識して、生徒と教師との信頼関係を深める。 ・班活動での決まり事や月ごとのクラスの集合写真などの教室掲示を整え、生徒達の達成感や成就感や一体感などを振り返らせる。

(2)　検証計画

検証の観点	検証の方法
○互いに認め合える好ましい人間関係を深める活動＜集団への支援＞について	
・ＳＧＥ・班活動・好ましい人間関係を深めるクラスのルールづくりの話し合いは、自己肯定感の高まりに結びつき、好ましい人間関係づくりに役立っているか。	・日常観察・アンケート・感想・Ｃ＆Ｓ質問紙
○互いに認め合える好ましい人間関係を深める活動＜個への支援＞について	
・チャンス相談・学級代表との定期的な話し合いの実施は、教師と生徒の好ましい人間関係の育成に結びついているか。 ・毎月のクラスの集合写真の教室掲示は、生徒達の日々の生活の振り返りの手立てとして有効であるか。	・日常観察・アンケート

４　研究の展開

(1)　互いに認め合える好ましい人間関係を深める活動＜集団への支援＞

①　SGEについて

【１学期を終えるにあたり、「クラスの仲間から感謝の言葉をもらいましょう」】

（肯定的な言葉の交流）・楽しい会話をしてくれてありがとう。・〇〇の仕事を頑張ってくれてありがとう。・〇〇係おつかれさま、ありがとう。これからも頑張ってね。

（感　想）・この一学期みんなと仲良くできて楽しかった。・これからも１Ａで楽しくやっていきたい。・自分のことを色々な気持ちで思ってくれていることが分かりました、二学期も頑張っていきたいです。・みんなが嬉しい言葉や勇気づけてくれる言葉を書いてく

れ、これからの学校生活が楽しくなります。これからもよろしくお願いします。

【合唱コンクールに向けて、「クラスの仲間からアドバイスをもらいましょう」】
（肯定的な言葉の交流）・同じパート同士、音程に気をつけてやろう。・一番の主役、がんばれ。・楽しく頑張ろう。大きい声を出そうね、賞をとるぞ、自信を持って。
（感　想）・僕は先生のアドバイスをしっかりと受け入れ、みんなのアドバイスも受け入れ実行する。目指すは優勝。・大きい声を出して悔いのない合唱コンクールにする。・大きな声で恥ずかしがらずに、このクラスにしか歌えない歌が楽しく歌えればいいな。

②　班活動及び全体での話し合いについて

＜基本的な活動の流れ＞

１〔個の意見〕２〔班の意見〕３〔全体の意見としてまとめる（クラスの意見の完成）〕
４〔クラスの共通理解および共通実践・教室掲示〕

・体育祭に向け…作成ｷｰﾜｰﾄﾞ：「協力」「団結」「一生懸命」「目指すは優勝」
・合唱コンクールで、…作成ｷｰﾜｰﾄﾞ：「しっかり呼吸」「仲間を信じる」「目指すは最優秀賞」

(2)　互いに認め合える好ましい人間関係を深める活動＜個への支援＞

①　チャンス相談・学級代表との定期的な話し合いについて

毎月、学級代表との話し合いを２回実施。後期からは前期学級代表を後期学級代表の補佐役に任命し、生徒から見たクラスの様子や問題を抱えている生徒の有無の確認などの話し合いを定期的に行う。生徒の休み時間の様子や移動教室での活動の様子など、担任１人だけでは把握しきれない情報を快く提供をしてくれた。そのもたらされた情報をもとに、チャンス相談につなげることができた。

②　学級掲示の環境を整えることについて

班及び全体での話し合いでまとめられた意見は、カラー印刷により目立つように掲示し、月ごとのクラスの集合写真は、クラス年表に見立てて提示する。

５　研究の結果と考察

(1)　研究の結果：肯定的な言葉の交流を通したＳＧＥを実施した結果、男女共に楽しそうに仲間から肯定的な意見を書いてもらっている生徒の様子が多く見られた。自己肯定感の下位群の生徒の上昇も見られた。月ごとの集合写真が増えていくたび、各行事の出来事やその月の出来事を振り返り、仲間同士で語り合っている姿を目にすることが多い。また、約束事などの掲示は、約束事の再確認の振り返りに役立っている。生徒からも、「約束事を見てごらん」などの発言もみられている。このことから、達成感や成就感を振り返らせる手だてとして効果的であると思われる。

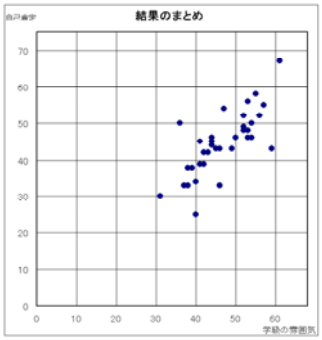


図1 C&S質問紙(6月実施)

(2)　考察：図２より、自己肯定感の下位群の引き上げが見られ、自分に自信を持って行動できる生徒が増えてきた。プロットが左右に大きく広がったことは、合唱コンクール後にＣ＆Ｓを実施したことから、クラス全体が目指す新たな目標を失ってしまった（燃え尽き症候群）とも考えられる。大きな行事の後にこそ、クラスが一丸となれるＳＧＥなどの実施が必要であると考える。

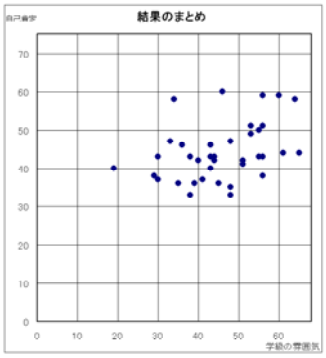


図2 C&S質問紙(11月実施)

また、不登校傾向の生徒のプロットの上昇が見られたが、大きく改善することはなかった。不登校傾向改善に向けた新たな取組や支援の工夫が必要であると考える。

Ⅲ－２　実践

特別研修員　　和田　佳子

１　実態

保健室に相談に来る生徒の実態として、４月から９月までの相談件数は 27 件、41 人（１年生７人、２年生 20 人、３年生 14 人）であり、その内訳は学校生活に関する相談：30 人、家庭に関する相談：５人、身体に関する相談：６人であった。学校生活に関する相談の中でも、友人関係やクラス・部活内での人間関係に関する相談が一番多く、担任や部顧問に言いづらいことを相談される場合もある。

また、保健室に来る生徒の日常的な観察の結果、身体的な不調の背景に、精神的な要因を抱えている場合や、家庭での問題で悩む生徒も多く、担任や生徒指導部と連携して、本人や保護者と対応することが増加している。また、自分に自信が持てず、自分から話しかけることができない場合や、話しかけられても、会話が続かない場合等、基本的なコミュニケーション技術が習得できていないことから、良好な友人関係が築けず孤立感を感じる場合も多く、このような生徒が、保健室登校や不登校、さらには進路変更に結びつくことが見られる。

２　実践研究の考え方

(1)　ソーシャルスキルトレーニング（以下ＳＳＴと記す）の１つである、相手の気持ちを考えた表現だけでなく、自分の意見や気持ちを大切にし、適切に表現する技術を習得することにより、人間関係が良好になり、学級内での孤立感や不適応感を軽減することが不登校の予防につながると考えられる。さらに、集団指導に養護教諭の専門性を取り入れることで、より効果が期待できると考えられる。

(2)　保健室の機能として、「心身の健康に関する健康相談」がある。身体的不調を訴え来室する生徒の背景に、精神的な要因があることも多く、心身両方の面を考慮して個別に対応することにより、生徒自身が自己理解を深め、さらに受容的な態度で接することにより自己肯定感が向上すると考えられる。

(3)　校内で担任や生徒指導部と連携したチーム支援を行うことで、生徒を多面的・総合的に把握し、共通理解と役割分担を明確にすることで、生徒の支援に養護教諭の役割を生かすことができると考えられる。

３　研究計画及び検証計画

(1)　研究計画

月	個別の支援	集団への支援
１学期	○不登校生徒に対する対応 ○実態把握 ○保健室来室生徒の相談	
２学期	○不登校生徒に対する対応 ○チャンス相談 ・保健室に来室する生徒については、身体面と精神面の両方を考慮して、生徒の訴えを聞く。 ・保健室での様子を担任に伝えたり、担任から学級内や家庭での様子を伺うなどの連携により、生徒の状態を正しく把握する。必要な場合は、保護者との面談も実施する。	○Ｃ＆Ｓ質問紙実施 ○ＳＳＴの実施 ・ＳＳＴについて理解する。 ・自己理解を深めるため行動チェックリストを活用する。 ・相手と自分の意見や気持ちを大切にし適切に表現するためのアサーティブ行動を理解する。 ○トレーニング（話合い） ・感情のコントロールと感情の表現について（他者理解と尊重、気持ちの表現について） ○演習　「優しい頼み方」と「上手な断り方」

	○ＳＳＴ後の事後指導	

(2)　検証計画

検証の観点	検証の方法
ソーシャルスキルの習得は、人間関係を良好にし、自己肯定感と勉強への意欲を高めることに有効であったか。	Ｃ＆Ｓ質問紙・アンケート調査・担任の日常観察
保健室でのチャンス相談は、生徒と教師の信頼関係作りや自己肯定感の向上に有効であったか。	Ｃ＆Ｓ質問紙・保健室来室状況・担任の日常観察
校内での連携（チーム支援）は生徒の実態把握や支援に役立ったか。	Ｃ＆Ｓ質問紙・保健室来室状況・担任の日常観察

4　研究の展開

(1)　1学期：保健室での相談活動を主体とした生徒の実態把握

実態把握の結果、２年生には不登校傾向の見られる生徒がいる。その内の１名は１年の３学期に人間関係のトラブルにより教室へ行くことが困難になり、保健室登校を続けていた。２年生になり教室へ復帰し、本人も頑張りたいと言っているが、欠席がちになってしまうため、保健室来室時には受容的に話を聞き、本人を励ますような声掛けを行った。他にも、４月から不登校となり、担任を中心としたチームにより、校内で組織的に対応した生徒がいる。養護教諭としてのかかわりとして、対象生徒と母親への面談を数回行った。

(2)　2学期：個別の支援と集団への支援

１学期に把握した実態より、保健室に来室する生徒が多く、不登校傾向の生徒が所属している２年生の１学級を対象にＳＳＴを企画した。クラスの実態をより明確に把握するため、10 月にＣ＆Ｓ質問紙を行った。右図はその結果である。「自己肯定感」にかなりのばらつきがあり、自己肯定感が 20 以下の低い生徒についても集団で見られていることと、不登校傾向の生徒がいることを考慮し、11 月にＳＳＴを実施した。実施についての注意点として、アサーティブ行動などの自己理解や、感情の理解や伝え方などの基本的なコミュニケーションについてのエクササイズを実施した上で、スキルが獲得できるように考慮した。さらになるべく和やかな雰囲気でできるよう、場所を教室ではなく、セミナーハウスで実施した。ＳＳＴの内容として、まずＳＳＴの説明を行い、アサーティブ行動について説明した。この時に、アサーティブ行動ができる事が重要ではなく、非アサーティブな行動だとしても、それに気づき感情をコントロールすることが大切だという所に注意をして説明した。次に感情をコントロールするためのエクササイズを実施した。今回は「怒り」の感情について、２人のスポーツ選手の感情コントロールの事例を挙げ、感情のコントロール方法について、生徒同士で話し合った。次に人間関係をよくするための他者尊重と感情を表現するエクササイズとして、二人組になり、お互いの良い所を言い合い、その時の気持ちについて話し合った。

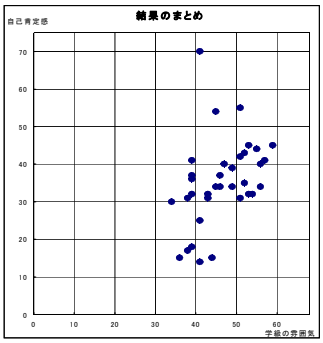


図3　SST事前

演習については、「優しい頼み方と上手な断り方」を取り上げ、断り方のパターンの例を挙げ、各自の方法についてワークシートに書き出した。その際、断られた相手の気持ちを予想して、相手を思いやる気持ちが大切な事を説明した。

事後指導として、ＳＳＴ実施後に再度Ｃ＆Ｓ質問紙を行った。その結果より、自己肯定感が 10 月の結果より 10 ポイント以上下がってしまった生徒（３名）について、担任に相談した所、担任も気にかけていた生徒だったため、個別面談を実施した。その結果、進路や部活、または家庭の問題で悩んでいることがわかった。

また１学期から継続してかかわっていた不登校傾向の生徒については、時どき欠席が見られるものの、部活にも参加していて、保健室の来室回数も減少が見られた。さらに、校内で「教育相談連絡会」を何度か設け、共通理解と援助の方向性を協議し、継続してチーム支援を行った。

５　研究の結果と考察

(1)　研究の結果

Ｃ＆Ｓ質問紙の結果より「自己肯定感」については、平均1.1ポイント上昇し、20以下の生徒（５名）については１人に減少した。学級の満足度については、ほぼ変化なししだった。アンケート結果より「アサーティブ行動は難しいと思った」「攻撃的行動をもう少し減らしたいと思う」「怒りを抑える時がほとんどだけど、たまに物にあたったりしちゃうのでコントロールできるようになりたい」という自己理解が深まった意見が見られた。優しい頼み方と上手な断り方については、「いざとなると実際思っているようにはできない」「断る時、相手がどう思うか、その時の気持ちを知ることができた」等の意見が見られた。

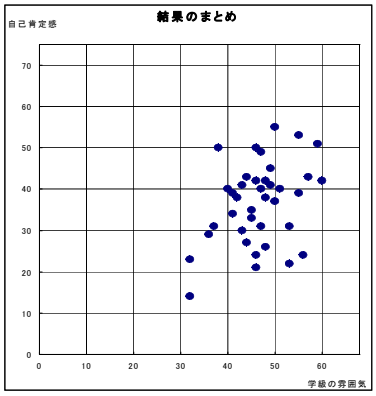


図4　SST事後

全体を通して、「楽しかった」「当たり前のことでも改めて考えなきゃわからなくなることもあるし、人間関係は難しいから、今日学んだことは大切だと思った」「人間関係を良くするためにできるようにしたい」という意見が見られた。

最近の学級の様子として、担任の日常観察の結果、「不登校傾向の生徒に関しては、一進一退の状態だが、全体的な様子として、授業中も積極的に発言する生徒が増えたり、良い反応が増えた。雰囲気も、孤立している生徒が減り明るくなった」ということがわかった。

(2)　考察

Ｃ＆Ｓ質問紙の結果と担任の観察の結果、生徒の意識に変化が見られ、学級の雰囲気が明るくなったことについて、今回のＳＳＴだけではなく、12月に予定されている修学旅行に向け、準備が進められているため、学級内の雰囲気が明るくなり、自己肯定感が上がったことも考えられる。また、授業中の発言が増えたことについては、勉強の意欲が向上したことにもつながり、全体的な自己肯定感の向上にも関連していると考えられる。自己肯定感の増減については、高校２年生という、高校生活の中でも一番感情の変化が激しい年齢なだけに、些細なことでも感情の変化が見られ、その変化に応じた関わりの重要性が感じられた。

また、不登校傾向の生徒についてのチーム支援について、校内で早い段階から共通理解が図られ、役割分担できたことは生徒の支援に役立った。養護教諭の役割として、生徒本人だけでなく、母親との面談も行った。このことは生徒を多面的にとらえることができ、また母親への支援にも役立ったと考える。

ＳＳＴの実施内容については、自己理解などの感情面のトレーニングを多く取り入れたことや、生徒同士が自由に話し合える時間を多く取った事は効果的だったが、50 分の授業時間内で、このようなトレーニングを本格的に実施するのは、大変難しいと感じた。生徒の要望と理解度を見ながら数回に分けて段階的に実施することで、より効果を得られると考える。

今回は、日常的に行っている「個別の支援」を学級に対する「集団への支援」に生かせることができ、さらにまた「個別の支援」につなげることができたので、集団と個の両方の視点を持つことの意味と重要性を感じた。今後も生徒を多面的にとらえ支援に生かしていきたい。

参考文献：　「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」　図書文化
「セルフアサーショントレーニング」東京図書

Ⅲ－３　実践

特別研修員　　根岸　香織

１　実態

現在の在籍数は 373 名。通信制では、自学自習が学習の基本であり、各科目ごとに、スクーリング（Ｓ）レポート（Ｒ）テスト（Ｔ）の３つに合格して、単位を修得することができる。

生徒は、年 16 回組まれているスクーリング及び、前期・後期のテスト時以外は、原則として登校することはない。科目ごとに規定のスクーリング回数が決まっていて、生徒は年間のスクーリング表から自分で都合のよい日を選んで登校するため、システム上、一般的に言われている「不登校」という概念がない。しかし、実際は、小・中学校や他の高校に於いて、不登校を経験した生徒が入学している。通信制のシステムに合った生徒については、卒業へ向けて順調にスクーリングやレポートに取り組んでいるが、人間関係が上手く構築できない生徒や、家庭的な環境に恵まれず、経済的な理由から通信制を選ぶなど、それぞれがもつ課題を改善することができず、スクーリングを中断する生徒も少なくない。

２　実践研究の考え方

好ましい人間関係を育成するための指導として、上記のような生徒が、どのようにしたら孤立感や不適応感を感じることなくスクーリングやレポートを継続し、卒業することができるかを考えた。そのため、「どうすれば、会う機会の少ない生徒が、楽しくスクーリングに出席し、学習意欲を持続することができるか？」ということをねらいとし、個に対しては、スクーリングが無いときには、メールや電話での相談を行い、スクールカウンセラー（以下 SC）や養護教諭、教育相談係と連携し、通信制課程における、好ましい人間関係の育成につながるよう努める。また、和やかな雰囲気でスクーリングを行うことで、生徒と生徒・教師と生徒のコミュニケーションが取りやすくなり、好ましい人間関係の育成の構築に役立つと考える。

集団に対しては、スクーリング時に、構成的グループ・エンカウンターを導入し、ショートエクササイズを行うことで、毎時間、集うメンバーが違っていても、その場のクラスの雰囲気が和やかになり、且つ、信頼関係を深めるコミュニケーションづくりを試みることによって、スクーリングを中断する生徒を減少させることができるのではないかと考える。

３　研究計画及び検証計画

(1)　研究計画

	個への支援	集団への支援
通年	○声かけ・チャンス相談を行い、生徒とのコミュニケーションを図る。 ○担当のスクーリング時間以外は、いつ生徒が来てもよいように保健室に居て、養護教諭との連携を図り、生徒の話を聞く。 ○火曜日に来校している SC と生徒をつなぐ。 ○スクーリングのない平日であってもメールや電話で悩みの相談を受ける。	○スクーリングを中断する生徒の減少をねらいとし、スクーリングの導入時に構成的グループ・エンカウンターを行う。スクーリング時に「よく来たね」という気持ちを伝えながら、さらに明るく楽しく和やかな雰囲気づくりを試みる事を通して、お互いに認め合える好ましい人間関係の育成につながるように努める。

＜ショートエクササイズ＞

・『あと出しじゃんけん』について		
取組	ねらい	効果
○スクーリングの導入で『あと出しじゃ	○集団が苦手な生徒が多いため、「簡単で」「席を立たずにできて」「参	○多くの生徒が参加しやすい。また、日頃から使ってい

んけん』を行う。 実施時間 10 分 （ スクーリング時間 50 分中 10 分程度）・感想記述５分	加する意志を自己決定できる」エクササイズを行う。 ○より楽しくスクーリングに出席し、学習意欲を持続させることができるよう支援する。 ○シェアリングは段階を追って行う	る「じゃんけん」を用いるため、抵抗無くエクササイズに参加し、多くの生徒が気楽に楽しむことができ、好ましいコミュニケーションを図ることができる。

・『どんな色が好き？』について

取組	ねらい	効果
○スクーリングの導入で『どんな色が好き』を行う。 実施時間 20 分 （20 分程度・感想記述５分）	○他とのコミュニケーションを図るショートエクササイズであり、共通な話題で話したことが無い生徒と円滑に話をする機会を味あわせる。	○集団が苦手な生徒でも、簡単で共通する内容のショートエクササイズなら、初めて会う生徒同士でも気楽に参加でき、好ましい人間関係を構築する基となる。

(2)　検証計画

①　個に対して

個への支援を行った後の生徒の様子から変容を検証する。

②　集団に対して

検証の観点	検証の方法
○個への支援として、声かけやチャンス相談養護教諭・SC との連携、スクーリングのない平日のメール・電話相談は有効であったか。	○スクーリング時の生徒の表情や、声の様子などから検証する。
○集団への支援として、スクーリングの導入時のショートエクササイズである『あと出しじゃんけん』や『どんな色が好き』は、お互いに認め合える好ましい人間関係の育成に役立ったか。	○エクササイズ後に取った、生徒からのアンケートの内容より検証する。 ○エクササイズを行っている生徒の表情や声の様子などから検証する。

4　研究の展開

(1)　個の指導について

スクーリング時には、レポート作成に関する質問を、全ての生徒の所を巡回し、声をかけ指導した。休み時間は、いつでもどこでもだれにでも、生徒の様子を見ながら声かけをした。

巡回をする前に、全体に対して、「どんなことでもいいから、恥ずかしがらないで質問してね。こんなことを聞いたら恥ずかしいなんて思わなくて大丈夫だから」と伝えておき、一人一人「わからないところはないですか？」と尋ねると、生徒は、恥ずかしそうな表情をしながらも嬉しそうに、レポートの質問をする生徒が多く見られた。また、周りの生徒が質問するところを見ることで、集団の中で、声を出すのが苦手な生徒であっても、徐々に質問できるようになった。レポートに「よく頑張っているね」とか「この考え方は、素晴らしい」など、コメントを書くことで、自信を持って、積極的にレポートに取り組む生徒が増えた。

また、休み時間には、お互いに笑顔であいさつや声かけができるようになり、コミュニケーションを深めることができた。チャンス相談では、保健室で養護教諭と一緒に話を聴いたり、別室に移動してゆっくり話を聴いたりする機会がもてた。メールや電話では、リラックスして悩みを相談でき、本音で何でも相談できる利点があり、早期問題解決につながった生徒もいた。

また、難病や発達障害をもつ生徒と保護者には、養護教諭と連携し、ゆっくりと保健室で話

を聴いた。SC につなげる場合は、フレックス定時制の教育相談係と連携し、空いている時間に組み込んでもらった。スクーリング時には、職員と情報を共有し、生徒の様子を温かく見守りつつ、指導にあたった。妊娠中の生徒には、体調のフォローやメールや電話での相談が中心となった。

(2) 集団指導について

① 『あと出しじゃんけん』について（6月実施）

スクーリングの導入時に 10 分間ショートエクササイズである『あと出しじゃんけん』を行った。生徒は、とても楽しそうだった。まずは、ゆっくり行い、だんだんスピードアップしていくうちに、ふだん聞かないような大きな声が出て、近くの生徒とも良いコミュニケーションがとれた。また、実態を考えて、どうしてもできない生徒には、「心の中でやってみてね」と一言付け加えておいたので、プレッシャーを感じずに楽しめたようだった。

②『どんな色が好き？』について（10月実施）

どんな色が好きかとその理由を個々に用紙に記入してもらうのことは、スムーズだった。「ねぇ、何色が好き？」などと、近くの生徒に聞いたり、「私は、〇〇色が好き。誰か一緒の人はいる？」と盛り上がっていた生徒も見られた。しかし、そのあとは、場所を指定しても、同じ色を選んだ生徒同士が集まれず、生徒に声をかけているうちに、残念ながら時間となってしまった。

5 研究の結果と考察

(1) 研究の結果

① 個に対して

声かけやチャンス相談を行った結果、最初は反応の無かった生徒が、笑顔を見せるようになった。こちらからの声かけがきっかけで、次の時には、生徒から声を掛けてくれるようになり、立ち話で、たわいもない話をすることで、悩みなどを聞く機会が増え、チャンス相談につながった。さらに、チャンス相談から、ゆっくり面談ができた生徒は、心の内を整理するごとに、穏やかな表情へと変わっていった。また、スクーリングを一人で受けていた生徒も、好ましい人間関係ができたことで、友達もでき、継続して登校する楽しみを見い出すことができた。

② 集団に対して

ア 『あと出しじゃんけん』について

各項目ごとに感想を書いてもらったところ、①『あいこ』簡単で易しかった。（90%）②『勝つ』始めは難しかったが、慣れるとできるようになった。（80%）③『負ける』負けるように出すのは、なかなか難しかった。（95%）④『全体の感想』とても楽しかった。（98%）という結果が出た。また、「負けることは難しかった。頭の中でまず、先生の手と逆に出さなくてはならないから、ちょっと混乱した。面白かった」「いい脳トレになりました。できるだろうと思っていても、なかなか判断がつかないものなんですね。疲れていた脳もおかげさまでスッキリしました。いい気分転換になりました」「すごくリフレッシュできました。一人でもできる脳の体操などを今度やってもらいたいです」などの意見が見られた。クラスによっては、私の代わりに率先して『あと出しじゃんけん』を行う側の生徒も見られ、導入には適切なショートエクササイズとなった。その後も、クラスの雰囲気が和やかになり、レポートの質問や生徒と生徒・教師と生徒のコミュニケーションがスムーズに図れるようになった。

イ 『どんな色が好き？』について

感想には、「たくさんある色の中から、好きな色を一色だけ選ぶのは、簡単なようでとても難しいと思った」「３色までは絞れたが、どの色が一番好きなのか、普段考えたこともなかったから、面白かった」「俺は、玉虫色を選んだけど、同じ色の人は、果たしていたかな？」と書かれていた。感想からは、楽しんでいる様子が伺われるが、同じ色同士で集まれなかったの

は、集団の中で、他の生徒と心の交流をするのが苦手な生徒が多いためと思われる。

(2)　研究の考察

①　個に対して

『声かけ』と『チャンス相談』『SC・養護教諭との連携』『メールや電話での相談』を通しての、好ましい人間関係作りについて生徒の悩みをゆっくり聞く機会をできるだけ多くもち、相手の気持ちに寄り添いながらコミュニケーションを図れたことは、好ましい信頼関係を作る上でとても有効であった。また、笑顔で接することにより、話しやすい雰囲気が生まれ、お互いに安心して声かけができるようになった。また、声かけを継続して行うことで、チャンス相談につながり、チャンス相談を重ねるごとに良い信頼関係が深まった。さらに、SC・養護教諭との連携をはかることで、多角的に生徒にかかわることができ、生徒の早期問題解決につながることから、チーム支援の重要性を感じた。スクーリングのない時には、メールや電話で相談を受けた。特に、メールは、気楽に心の内を伝えられる手段として有用であった。生徒が自らの課題を整理し、自分を見つめ直せる良い機会になり、そこに適切なアドバイスを加えることで、問題解決につながるケースが多く見られた。年度始めは、年に数回しか会わない生徒もいるため、個人写真ファイルを作り、なるべく早い段階で名前を覚えられるよう努力した。写真で覚えた生徒には、声かけがスムーズになり、その生徒のどこに課題があるのか、何を解決したいのかを感じながら、声かけやチャンス相談に臨んだ。何度もやりとりをする内に、好ましい人間関係が築けたように思う。「継続は力なり」の言葉のように、一時的なものでなく、チャンスを生かしながら、生徒一人一人の良い所を認め、励まし伸ばす事が大切だと改めて感じている。安心感を持たせ、癒しつつ、丁寧な対応を繰り返しながら、個にふさわしい対応をし、生徒一人一人の役に立てたら嬉しく思う。また、同じ生徒であっても、体調の良い時、悪い時の対応やストレスの受け取り方も課題となろう。今後も、ねばり強く温かく思いやりの気持ちをもって、接していきたい。学校に来れば、自分のことを気に掛けてくれる人がいるという安心感を与え、学校と生徒との橋渡しとなることが大切である。

②　集団に対して

ア　『あと出しじゃんけん』を通しての好ましい人間関係作りについて

実践結果から、やってみたら難しいと感じつつも、面白く楽しかったと思っている生徒が多く、学習前の雰囲気作りには効果的であり、生徒の実態から見ても、好ましい人間関係の育成をめざした信頼関係づくりを目的とするエクササイズとして、ふさわしかったように感じた。

生徒の表情もとても明るく、笑顔や大声で楽しんでいる姿も見られ、クラスの雰囲気もとても良く、生徒と生徒・教師と生徒の良いコミュニケーションが図れたように思う。その結果、その後のレポートの個人指導が、和やかな雰囲気のためか、いつもよりスムーズに行われた。

シェアリングについては、今回、ショートエクササイズが初めてである。集団や人とのコミュニケーションが苦手な生徒の気持ちを配慮して行わなかったが、紙に書くなど、話さなくても良い工夫や少人数から始めるなど、意見を言いやすい環境を整えて取組たい。

イ　『どんな色が好き？』を通しての好ましい信頼関係作りについて

好きな色を書くことはできたが、通常は、『フレックス通信』の日程を説明した後、すぐに、レポート作成や質問を受ける時間となるので、なかなか心の準備ができない生徒が多かった。集団が苦手な生徒にとっては、気持ちを表すことに不慣れであり、どうして良いかわからなかった様に思う。あらかじめ、全員に向けての便りなどでエクササイズを紹介するなど、事前の工夫が必要であると感じた。

参考文献　:「実践教育のすすめ方」　群馬県教育研究所連盟

Ⅳ　研究の成果と課題

1　成果

チーム支援について

○早い段階から共通理解が図られ、役割分担でき生徒の支援に役立てられた。
○生徒理解を多面的にとらえることができ、保護者への支援に役立てられた。

自己表現について

＜ＳＳＴを取り入れて＞
○人間関係を良好にし、自己肯定感と勉強への意欲を高めることに有効であった。
○自己肯定感の高まりに結びつけられ、好ましい人間関係づくりに役立てられた。

学級の雰囲気について

＜ＳＧＥを取り入れて＞
○肯定的な言葉の交流を通して、自分の良さを発見し、相手のよさを認めうことができた。
○作成キーワードや月毎集合写真の掲示は、達成感や成就感を育む手立てとなった。

チャンス相談及び継続的な相談活動について

○声掛けを継続して行いことで、チャンス相談につながり、チャンス相談を重ねるごとに信頼関係が深まった。
○継続的な相談活動を通して、教師と生徒の信頼関係が深められた。

生徒の実態把握について

○日常観察の強化や継続的な相談活動は、多面的な生徒理解がなされ、新たな個や集団への手立てや支援につなげることができ有効であった。
○学級代表との定期的な話し合は、生徒からみたクラスの様子等、把握しきれない情報を得ることができ、チャンス相談等につなげることができ有効であった。

2　課題

(1)　ＳＧＥ・相談活動等の取り組みを通して、好ましい人間関係をつくり、不登校傾向にある生徒の解決に努めた。その結果、Ｃ＆Ｓ質問紙における不登校傾向にある生徒の自己肯定感は高まり、プロットの上昇がみられた。しかし、不登校傾向の直接的な解決には結びつかなかった。不登校傾向改善に向け、実態をしっかりと把握した上でチーム支援やＳＳＴも平行して取り入れるなど、総合的に取り組む工夫が必要であると考える。

(2)　ＳＳＴについて、スキルの習得のためには、生徒のニーズに応じた段階的な実施が重要である。さらにスキルの習得を促進するためには、少人数制での実施がより効果的だと考えられる。このような実施に向けた指導力の強化と、校内の協力体制作りが今後の課題である。また個別の支援については、生徒に対する支援だけでなく、生徒を取り巻く家庭や環境への支援も必要となるため、校内の組織作りと連携を充実させることが今後の課題である。

(3)　今後も、校長先生をはじめ、Ⅰ・Ⅱ部・Ⅲ部の教育相談係や養護教諭、スクールカウンセラーとの連携を深め、地域の学校や病院等ともつながりを持ちながら、通信制の特性を活かして、生徒一人一人のニーズに応え、良い所を認め、伸ばす教育を目指し、努めていきたいと思う。